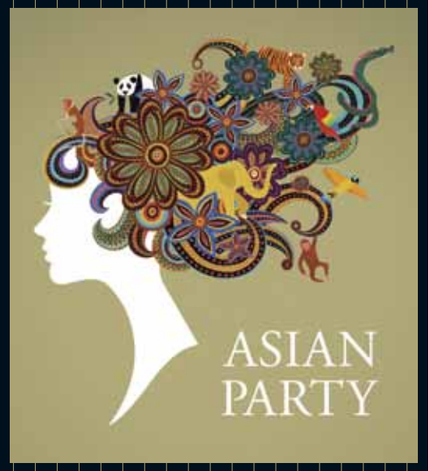


主催
福岡市、公益財団法人よかトピア記念国際財団

後援
外務省、文化庁

発行
福岡アジア文化賞委員会事務局
〒810-8620 福岡市中央区天神1－8－1
福岡市総務企画局国際部内
TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130
e-mail acprize@gol.com
http://fukuoka-prize.org/

第23回
FUKUOKA PRIZE 2012

福岡アジア文化賞
報告書

大賞
ヴァンダナ・シヴァ
インド／環境哲学者

学術研究賞
チャーンウィット・カセートシリ
タイ／歴史学者

芸術・文化賞
キドラット・タヒミック
フィリピン／映画作家

芸術・文化賞
クス・ムルティア・パク・ブウォノ
インドネシア／宮廷舞踊家

FUKUOKA ASIAN MONTH

福岡アジア文化賞の受賞者

■＝創設特別賞　■＝大賞　■＝学術研究賞　■＝芸術・文化賞

★福岡

ネパール
- 第15回 ラーム・ダヤル・ラケーシュ（民俗文化研究者）

パキスタン
- 第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（カッワーリー歌手）
- 第17回 アクシ・ムフティ（民俗文化保存専門家）

インド
- 第2回 ラヴィ・シャンカール（音楽家・シタール奏者）
- 第5回 パドマー・スブラマニヤム（舞踊家）
- 第8回 ロミラ・ターパル（歴史学者）
- 第15回 アムジャッド・アリ・カーン（サロード奏者）
- 第18回 アシシュ・ナンディ（社会・文明評論家）
- 第20回 パルタ・チャタジー（政治学・歴史学者）
- 第23回 ヴァンダナ・シヴァ（環境哲学者）

第23回大賞受賞者
ヴァンダナ・シヴァ

中国
- 第1回 巴金（作家）
- 第4回 費孝通（社会学・人類学者）
- 第7回 王仲殊（考古学者）
- 第13回 張芸謀（映画監督）
- 第14回 徐冰（アーティスト）
- 第15回 厲以寧（経済学者）
- 第17回 莫言（作家）
- 第20回 蔡國強（現代美術家）

ブータン
- 第16回 タシ・ノルブ（伝統音楽家）

モンゴル
- 第4回 ナムジリン・ノロゥバンザト（声楽家）
- 第17回 シャグダリン・ビラ（歴史学者）

ミャンマー
- 第11回 タン・トゥン（歴史学者）
- 第16回 トー・カウン（図書館学者）

スリランカ
- 第13回 キングスレー・M・デ・シルワ（歴史学者）
- 第15回 ローランド・シルワ（文化遺産保存建築家）
- 第19回 サヴィトリ・グナセーカラ（法学者）

バングラデシュ
- 第12回 ムハマド・ユヌス（経済学者）
- 第19回 フォリダ・パルビーン（音楽家）

タイ
- 第1回 ククリット・プラモート（作家・政治家）
- 第5回 スパトラディット・ディッサクン（考古学・美術史学者）
- 第10回 ニティ・イヨウシーウォン（歴史学者）
- 第12回 タワン・ダッチャニー（画家）
- 第18回 シーサック・ワンリポードム（人類学・考古学者）
- 第23回 チャーンウィット・カセートシリ（歴史学者）

第23回学術研究賞受賞者
チャーンウィット・カセートシリ

香港
- 第19回 アン・ホイ（映画監督）

台湾
- 第10回 侯孝賢（映画監督）
- 第18回 朱銘（彫刻家）

ラオス
- 第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン（織物研究家）

ベトナム
- 第7回 ファン・フイ・レ（歴史学者）

カンボジア
- 第8回 チェン・ポン（劇作家・芸術家）
- 第22回 アン・チュリアン（民族学者・クメール研究者）

マレーシア
- 第4回 ウンク・A・アジズ（経済学者）
- 第11回 ハムザ・アワン・アマット（影絵人形遣い）
- 第13回 ラット（マンガ家）
- 第19回 シャムスル・アムリ・バハルディーン（社会人類学者）

シンガポール
- 第10回 タン・ダウ（ビジュアルアーティスト）
- 第14回 ディック・リー（シンガーソングライター）
- 第21回 オン・ケンセン（舞台芸術家）

インドネシア
- 第2回 タウフィック・アブドゥラ（歴史学者・社会科学者）
- 第6回 クンチャラニングラット（文化人類学者）
- 第9回 R.M.スダルソノ（舞踊家・舞踊研究者）
- 第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール（作家）
- 第23回 クス・ムルティア・パク・ブウォノ（宮廷舞踊家）

第23回芸術・文化賞受賞者
クス・ムルティア・パク・ブウォノ

韓国
- 第3回 金元龍（考古学者）
- 第6回 韓基彦（教育学者）
- 第8回 林権澤（映画監督）
- 第9回 李基文（言語学者）
- 第16回 任東権（民俗学者）
- 第18回 金德洙（伝統芸能家）
- 第21回 黄秉冀（音楽家）
- 第22回 趙東一（文学者）

日本
- 第1回 黒澤明（映画監督）
- 第1回 矢野暢（社会科学者）
- 第2回 中根千枝（社会人類学者）
- 第3回 竹内實（中国研究者）
- 第4回 川喜田二郎（民族地理学者）
- 第5回 石井米雄（東南アジア研究者）
- 第6回 辛島昇（歴史学者）
- 第7回 衞藤瀋吉（国際関係研究者）
- 第8回 樋口隆康（考古学者）
- 第9回 上田正昭（歴史学者）
- 第10回 大林太良（民族学者）
- 第12回 速水佑次郎（経済学者）
- 第14回 外間守善（沖縄学者）
- 第17回 濱下武志（歴史学者）
- 第20回 三木稔（作曲家）
- 第21回 毛里和子（現代中国研究者）

フィリピン
- 第3回 レアンドロ・V・ロクシン（建築家）
- 第12回 マリルー・ディアス＝アバヤ（映画監督）
- 第14回 レイナルド・C・イレート（歴史学者）
- 第23回 キドラット・タヒミック（映画作家）

第23回芸術・文化賞受賞者
キドラット・タヒミック

アジア以外の国・地域

イギリス
- 第1回 ジョゼフ・ニーダム（中国科学史研究者）

アメリカ
- 第2回 ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）
- 第3回 クリフォード・ギアツ（文化人類学者）
- 第6回 ナム・ジュン・パイク（ビデオアーティスト）
- 第9回 スタンレー・J・タンバイア（人類学者）
- 第21回 ジェームズ・C・スコット（政治学者・人類学者）

オーストラリア
- 第5回 王賡武（歴史学者）
- 第13回 アンソニー・リード（歴史学者）

アイルランド
- 第11回 ベネディクト・アンダーソン（政治学者）

フランス
- 第20回 オギュスタン・ベルク（文化地理学者）

ドイツ
- 第22回 ニールズ・グッチョウ（建築史家・修復建築家）

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 …… p01・02
福岡アジア文化賞とは …… p03・04
第23回受賞者
大賞　ヴァンダナ・シヴァ …… p05
学術研究賞　チャーンウィット・カセートシリ …… p06
芸術・文化賞　キドラット・タヒミック …… p07
芸術・文化賞　クス・ムルティア・パク・ブウォノ …… p08
授賞式 …… p09～12
市民交流事業
ヴァンダナ・シヴァ …… p13・14
チャーンウィット・カセートシリ …… p15・16
キドラット・タヒミック …… p17・18
クス・ムルティア・パク・ブウォノ …… p19・20
国内・海外会見および報道実績 …… p21・22
福岡アジアマンス、広報活動 …… p23・24
歴代受賞者名鑑 …… p25～30

福岡アジア文化賞とは

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、23年間で92人の素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりはアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

大　賞	学術研究賞	芸術・文化賞
賞金　¥5,000,000	賞金　¥3,000,000	賞金　¥3,000,000
アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体。	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「学術研究」には歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「芸術・文化」には美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる

3. 対象圏域

東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催

福岡市、公益財団法人よかトピア記念国際財団

5. 運営・選考組織

(1) 福岡アジア文化賞委員会

賞の運営母体として、審査委員会で決定した受賞者を承認します。

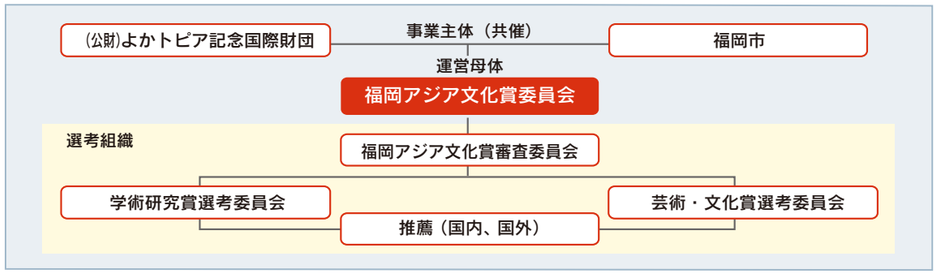
(2) 福岡アジア文化賞審査委員会／学術研究賞選考委員会／芸術・文化賞選考委員会

各賞ごとに設けられた選考委員会で大賞および各賞受賞候補者を選考し、さらに各賞の選考委員長などで構成される審査委員会で総合的に審査し、受賞者を決定します。

(3) 推薦依頼

広く候補者を募るため、国内外の教育・研究機関、芸術・文化団体、報道機関など7千人を超える関係者に、推薦を依頼しています。

運営・選考組織図



第23回福岡アジア文化賞のあゆみ

2011.07	54か国・地域約7,200人に第23回受賞候補者の推薦を依頼
2012.01～02	芸術・文化賞（1月29日）、学術研究賞（2月5日）各選考委員会にて、推薦された30か国・地域の受賞候補者226名・団体について選考
2012.03	審査委員会（3日）にて審査
2012.04	審査・選考合同委員会（22日）
2012.06	文化賞委員会にて4人の受賞者を承認し福岡記者会見で発表（4日）
2012.07～08	インド（デリー）記者会見（7月23日）、フィリピン（マニラ）記者会見（8月8日）
2012.09	授賞式（13日）、学校訪問（11日、14日）、市民フォーラム（11日、14日～16日）、アジア文化サロン（10日、15日、16日） タイ（バンコク）記者会見（30日）
2012.11	インドネシア（ジャカルタ）記者会見（1日）

第23回福岡アジア文化賞　審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会	福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞	福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞
委員長 **有川節夫** 九州大学総長 福岡アジア文化賞委員会副会長	委員長 **稲葉継雄** 九州大学名誉教授	委員長 **小西正捷** 立教大学名誉教授
副委員長 **山崎一樹** 福岡市副市長 福岡アジア文化賞委員会副会長	副委員長 **清水　展** 京都大学東南アジア研究所教授	副委員長 **藤原惠洋** 九州大学大学院芸術工学研究院教授
委員 **稲葉継雄** 九州大学名誉教授 学術研究賞選考委員会委員長	委員 **天児　慧** 早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科教授	委員 **石坂健治** 日本映画大学教授 東京国際映画祭アジア部門ディレクター
委員 **川村　裕** 国際交流基金統括役	委員 **石澤良昭** 上智大学アジア人材養成研究センター特任教授	委員 **後小路雅弘** 九州大学大学院人文科学研究院教授
委員 **小西正捷** 立教大学名誉教授 芸術・文化賞選考委員会委員長	委員 **末廣　昭** 東京大学社会科学研究所教授	委員 **内野　儀** 東京大学大学院総合文化研究科教授
委員 **清水　展** 京都大学東南アジア研究所教授 学術研究賞選考委員会副委員長	委員 **竹中千春** 立教大学法学部教授	委員 **宇戸清治** 東京外国語大学大学院 総合国際学研究院言語文化部門教授
委員 **土屋直知** 株式会社正興電機製作所最高顧問	委員 **中村尚司** 龍谷大学研究フェロー	委員 **川村　湊** 法政大学国際文化学部教授
委員 **藤原惠洋** 九州大学大学院芸術工学研究院教授 芸術・文化賞選考委員会副委員長	委員 **新田栄治** 鹿児島大学法文学部教授	委員 **藤井知昭** 国際文化研究所所長

2012年12月現在

第23回 大賞 受賞者 *Grand Prize*

ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA

インド ／ 環境哲学

環境哲学者（科学・技術・エコロジー研究財団理事長）

●主な経歴

1952	インド、ウッタラーカンド州デーラ・ドゥーン市生まれ
1973	インド、パンジャブ大学修士号（物理学）
1976	カナダ、ゲルフ大学修士号（科学哲学）
1978	カナダ、ウェスタン・オンタリオ大学博士号（量子理論）
1979-82	インド理科科学院、インド経営大学にて学術的研究
1982-	科学・技術・自然資源政策研究財団（現、科学・技術・エコロジー研究財団）創立者、理事長
1987-	種子保全運動を開始、1991年よりナヴダニヤ（Navdanya）運動として生物多様性や資源保全の活動を国内外で広く展開
1993	ライト・ライブリフッド賞 国連環境計画グローバル500賞 国連アースデイ国際賞
1994-	グローバリゼーションに関する国際フォーラム創立メンバー、役員
2001-	イギリス、ドゥーン・バレーに持続可能な生活のための国際大学「種子の学校（Bija Vidyapeeth）」創設
2010	シドニー平和賞
2010-11	オレゴン大学法科大学院法政特別教授
2011	ノルウェー、オスロ大学名誉博士

●主な著作

- 『緑の革命とその暴力』ロンドン：ゼッド・ブックス；ペナン：サードワールド・ネットワーク，1991.［日本語版：浜谷喜美子訳，日本経済評論社，1997.］
- 『生物多様性の危機－精神のモノカルチャー』ニューデリー：ゼッド・ブックス，1993.［イタリア語・日本語版翻訳あり　日本語版：高橋由紀・戸田清訳，三一書房，1997.］
- 『アース・デモクラシー―地球と生命の多様性に根ざした民主主義』ボストン：サウス・エンド・プレス，2005.［日本語版：山本規雄訳，明石書店，2007.］

●贈賞理由

ヴァンダナ・シヴァ氏は、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきたインドの環境哲学者である。とくに、貧しい人々や女性の視点に立って、開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘してきた。

シヴァ氏は、1952年インド北部のデーラ・ドゥーン市に生まれ、カナダのゲルフ大学で科学哲学の修士号、ウェスタン・オンタリオ大学で量子理論を研究し、物理学の博士号を取得した。第一線の科学者としての研鑽を基礎に、自然と人間の接点を模索するため、帰国後、1982年に科学・技術・自然資源政策研究財団を設立した。

1980年前後のインドは変革の波に洗われ、新しい民衆運動が続々と登場していた。故郷の山村では、女性たちが開発業者から森を守る戦いを繰り広げていた。ヒマラヤ山麓で樹木の伐採を阻止するために、樹木に「抱きつく（chipko）」という非暴力的な闘争を進めた、チプコ運動はその一つである。シヴァ氏は、この草の根の運動を世界に知らしめ、支援を呼びかけると同時に、エコロジーとフェミニズムを結び付ける「エコフェミニズム」という新しい思想と運動の領域を切り開いた。

1990年代になると、シヴァ氏は、グローバルな市場経済の影響で急速に変えられていく農民の暮らしをどう守るか、という課題に取り組み始めた。1991年にNGO団体ナヴダニヤを発足させ、伝統的な種子の保存、有機農業、フェアトレードなどの活動に着手し、2001年には持続可能な生活をテーマとする国際大学を設立している。これらの活動の中核に「アース・デモクラシー（大地の民主主義）」という思想があり、平和・公正・持続可能性という価値を追求する運動として、特殊なものと普遍的なもの、多様なものと共通のもの、ローカルなものとグローバルなものを結びつけ、地球に暮らす生き物の共同体、つまり「大地の家族」を守ろうと人々に呼びかけている。

この思想を書き表した『アース・デモクラシー―地球と生命の多様性に根ざした民主主義』のほか、シヴァ氏の著作は多い。『緑の革命とその暴力』『生物多様性の危機―精神のモノカルチャー』『生きる歓び―イデオロギーとしての近代科学批判』など邦訳も少なくない。1993年には「もう一つのノーベル平和賞」として知られるライト・ライブリフッド賞も受賞した。

独自の思想を力強く語り、草の根の民衆を巻き込んで社会的な運動を進めてきたヴァンダナ・シヴァ氏は、まさに「福岡アジア文化賞－大賞」にふさわしい。

第23回 学術研究賞 受賞者 *Academic Prize*

チャーンウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI

タイ ／ 歴史学・政治学

歴史学者（タマサート大学教養学部東南アジア研究プログラム上級顧問）

●主な経歴

1941	タイ、ラーチャブリー県バンポーン郡生まれ
1963	タイ、タマサート大学学士号（外交）
1972	ニューヨーク、コーネル大学博士号（東南アジア史）
1973-2001	タマサート大学教養学部歴史学科講師
1977-78	京都大学東南アジア研究所客員研究員
1978-	人文社会科学教科書振興財団事務局長
1981-83	タマサート大学教養学部歴史学科長
1985-86	コーネル大学東南アジア研究プログラム客員研究員、教授
1991-	シャム・アーカイブ協会会長
1991-94	タマサート大学教養学部長
1994-95	タマサート大学学長
1995	東南アジア研究地域交流プログラム創立メンバー
1998-	タイ国トヨタ財団理事
2000-01	タマサート大学東南アジア研究所所長（タイにおける最初の学部生向け東南アジア研究プログラム）
2002-	タマサート大学教養学部東南アジア研究プログラム上級顧問

●主な著作

- 『アユタヤの興隆－14 ～ 15世紀のシャムの歴史』（英語），クアラルンプール：オックスフォード出版局，1975.
- 『アユタヤー歴史と政治』バンコク：タイ国トヨタ財団、人文社会科学教科書振興財団，1999.
- 『アユタヤ Discovering Ayutthaya』（編集主幹），バンコク：タイ国トヨタ財団，人文社会科学教科書振興財団，2003.

●贈賞理由

チャーンウィット・カセートシリ氏は、タイおよび東南アジアを代表する歴史学者である。氏はタイの歴史とりわけアユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究にも大きな成果をあげ、それらの成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行い、国際的に高く評価されている。

チャーンウィット氏はタイのタマサート大学政治学部を卒業後、1972年にアメリカのコーネル大学で博士号を取得。1973年にタマサート大学に奉職。以来教授、教養学部長、学長として、激務にありながら多くの研究業績をあげ、その成果を教育の場に活かすこと、タイ社会へ発信することに積極的に取り組んできた。なかでも、タマサート大学教養学部にタイで最初の東南アジア学の講座を設立した意義は大きい。また、人文社会科学教科書振興財団の事務局長として、タイの教育界や学界に優れた教科書や専門書を生み出すことに貢献してきた。さらに、京都大学、カリフォルニア大学、コーネル大学、ハワイ大学等に招聘され、研究者として国際的に活躍している。

チャーンウィット氏の研究はアユタヤ史を中心として、タイ近現代史にまで及んでいる。アユタヤ史の研究では『アユタヤの興隆―14～15世紀のシャムの歴史』、『アユタヤ―歴史と政治』などの著書において、広く東南アジア史のなかに国際都市アユタヤを位置づける新しい歴史像を提示した。それは、従来のタイ歴史学界で主流であった王朝史を乗り越え、以後のアユタヤ史研究の新境地を切り拓いた。その他にもアユタヤ史に関する多くの著作を発表している。これらの成果をもとにタイの学者を結集して執筆・編集された『アユタヤ』は日本語、英語にも翻訳され、多くの人々に読まれている。近現代史研究においても『タイ政治史：1932～1957』をはじめとする著作により多大な貢献をなしてきた。また、現代タイの社会問題に対しても積極的に発言を続けるなど、社会的影響力のある学者として高名である。

このようにチャーンウィット・カセートシリ氏は、アユタヤ史だけでなく、東南アジア全体の歴史研究および近現代タイの歴史や政治・経済・社会の研究にも多大な成果をあげてきた。また、その成果を教育において普及させる活動を展開し、タイ史研究者どうしの国際的連携にも尽力してきた。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞―学術研究賞」にふさわしい。

キドラット・タヒミック

フィリピン ／ 映画　**Kidlat Tahimik**

映画作家、インスタレーション・パフォーマンスアーティスト、文化観察者

●主な経歴

1942　フィリピン、バギオ市生まれ
1963　フィリピン大学ディリマン校学士号（言語、演劇）
1969-74　パリ、経済協力開発機構(OECD)研究員
1972　ペンシルバニア大学ウォートンスクール修士号（経営学）
1977　第1作監督作品『悪夢の香り』を発表、ベルリン国際映画祭国際映画批評家連盟賞
1981　アメリカで『悪夢の香り』公開（フランシス・フォード・コッポラ［アメリカン・ゾーエトロープ社］による配給）
1982　『悪夢の香り』国際交流基金映画祭にて上映（日本における初めての作品上映）
1986　バギオ市にNPO芸術組織バギオ・アーツ・ギルズ創設
1987　『トゥルンバ祭り』第2回東京国際映画祭（アジア秀作映画週間部門）にて上映
2005　『悪夢の香り』第51回ヴェネツィア・ビエンナーレにて上映
2009　フィリピン大学よりプラリデル賞
2010　『悪夢の香り』福岡アジア美術館あじび美術講座「フィリピンのビデオ・アート－Video art in thePhilippines－」にて特別上映
2012　国際シンポジウム「スクール・オブ・リビングトラディッションズ（伝統のための学校）」主催者（バギオ市にて開催）
大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2012参加

●主な映画作品

- 『悪夢の香り』（監督，脚本，製作，主演，1977）*Perfumed Nightmare*
- 『月でヨーヨー』（監督，1979）*Who Invented the YoYo, Who Invented the Moon Buggy?*
- 『トゥルンバ祭り』（監督，脚本，1983）*Turumba*
- 『虹のアルバム 僕は怒れる黄色' 94』（監督，製作，出演，1994）*I am Furious Yellow '94; Why is Yellow Middle of Rainbow?*

●贈賞理由

キドラット・タヒミック氏は、制作・監督のみならず脚本・撮影・編集・出演までを自ら行う個人映画作家のアジアにおける先駆的存在として、世界の映画文化に大きな貢献を果たしてきた。「第三世界」としてのフィリピンに生きる者の自覚と矜持を独特のユーモアに包んで描く作品群は、国際的に高く評価されている。

1942年バギオに生まれたタヒミック氏は、フィリピン大学卒業後、アメリカのペンシルバニア大学大学院で経営学の修士号を取得。パリの経済協力開発機構（OECD）の研究員となったのち、帰国して自主制作映画作家としての道を歩みはじめた。1977年の第1作『悪夢の香り』は同年のベルリン国際映画祭で国際映画批評家連盟賞を受賞し、翌年にはアメリカで公開されるに至った。

純朴なジープニー（乗り合いタクシー）運転手がアメリカ企業によって愛車とともに突如パリに派遣され、大都会で右往左往する珍騒動を、フィクションとドキュメンタリーを混在させる斬新な映像話法で描き、笑いのなかに先進国の独善と近代化の裏面を揶揄する『悪夢の香り』は、氏の名を一躍世界に広め、後進のアジアの映画作家たちに大きな影響を与えることになった。

続いて、フィリピン人の発明とされる玩具のヨーヨーを月面で実行するという妄想に取りつかれた青年が、家庭の日常品でロケットを組み立てて月旅行を成功させる『月でヨーヨー』、息子の成長を記録した個人映像から激動のフィリピン現代史を浮かび上がらせる『虹のアルバム　僕は怒れる黄色' 94』などの個性的な作品を次々と発表。その後もインディペンデント映画作家の旗手として、自主制作と上映を続けている。

また、自作上映と併催して先住民イゴロト族のグループと踊りや寸劇のパフォーマンスを行い、美術の分野でも、埼玉県飯能市の竹寺や新潟県の越後妻有にしばしば長期滞在して、インスタレーションや映像作品を創作するなど、ジャンルを越境するアーティストとして幅広く活躍している。1986年にはバギオ・アーツ・ギルズを創設し、若手アーティストの育成にも尽力している。福岡でも、大濠公園でのパフォーマンス、福岡アジア美術館での展示と上映を行っている。

このようにキドラット・タヒミック氏は、先駆的なアジアの個人映画作家として多大な成果を挙げて後続世代を先導し、現在もなお多彩な創作活動を展開している。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞―芸術・文化賞」にふさわしい。

クス・ムルティア・パク・ブウォノ

インドネシア ／ 舞踊　**G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono**

宮廷舞踊家（スロカルト王家教育文化財団代表、スロカルト王家文書局長）

●主な経歴

1960　インドネシア、中部ジャワ州ソロ市生まれ
1984　日本、ヨーロッパ、米国にてスロカルト王家宮廷舞踊公演
1991-　スロカルト王家教育文化財団代表
1992　ジャワ宮廷にかつて秘曲として伝承されていたガムラン音楽スリンピ・ソンゴバディの録音（1994年にキングレコードよりCDとして刊行）
1993　米国、ネクスト・ウェーブフェスティバルにて宮廷舞踊公演「PASSAGE THROUGH THE GONG」（サルドノ・W・クスモ氏と共演）
1995　インドネシア共和国建国50周年記念公演「ソロ・スロカルト王家のガムランと舞踊－クラトンの夢と伝説」宮廷舞踊団団長（東京、日生劇場）
1997　インドネシア・日本友好祭「ジャワ・スロカルト王家のガムランと舞踊（青銅の香織・花の響き）」舞踊団団長（東京）
中部ジャワ州政府よりバクティ・ウパプラダナ賞
1998　ジョクジャカルタ特別区アディパラより観光・芸術文化賞
1999-2004　インドネシア国民協議会議員
2004-　スロカルト王家文書局長
2005　ドイツ、ドレスデン音楽祭にて宮廷舞踊公演「スロカルト王家の秘義」
2009　パリ、フェスティバル・ド・イマジネールにて宮廷舞踊公演
2009-　インドネシア国民協議会議員
2010　韓国、安東国際民俗芸術・仮面舞踊フェスティバルにて公演

●主な作品（CD）

- 『中部ジャワ・ガムランの巨匠／王宮の煌めき』（キングレコード，日本，1999）
- 『決定版！癒しのアジア』（キングレコード，日本，2003）
- 『中部ジャワ／ソロ、ススフナン王宮のガムラン』（キングレコード，日本，2008）

●贈賞理由

クス・ムルティア・パク・ブウォノ氏は、中部ジャワのマタラム王家に300年余りに亘って伝承されてきた宮廷舞踊の継承者である。幼少よりジャワ文化を深く学んだ氏は、伝統ある宮廷舞踊を広く紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展のための努力を続け、国際的にも舞踊家としての評価を高めた。

ジャワのマタラム王家は後にソロのスロカルトとジョクジャカルタの2王統に分離して衰退し、さらには押し寄せる近代化やグローバリゼーションの潮流の中にあって多くの困難な課題を抱えながらも、クス・ムルティア氏は、ガムラン音楽、舞踊、影絵芝居、さらには宗教儀礼などの伝統文化を守り続け、若い世代への継承にも尽力してきた。

今日、中部ジャワ文化を代表する存在といえるクス・ムルティア氏は、スロカルト王家の王女として1960年に生まれた。氏は、宮廷に伝承されてきた舞踊を幼時より学び始め、その才能を早くから認められてきた。王家の一員として成長しながら、社会や経済が近代化していく中での伝統文化の存続について深く懸念し、1982年よりスブラス・マレット大学でジャワ文学を専攻し、ジャワ文化の知識を拡げていった。

また、中部ジャワ宮廷文化の存続と社会的理解を得るため、ジャワ宮廷にかつて秘曲として伝承されていたガムラン音楽スリンピ・ソンゴバディを録音してCD化し、その刊行に努力した。さらに、ジャワのみならず日本、香港、ヨーロッパやアメリカでも宮廷舞踊と大編成ガムラン音楽演奏の公演に尽力し、国内外におけるジャワ宮廷音楽への理解を広げて高い評価を受けるにいたった。つとに注目を集めていたバリ島の歌舞に並び、ジャワの伝統文化が国際的に広く認知される契機をつくったその功績は大きい。

これらの活動に加え、インドネシア国民協議会議員として、伝統文化の保存をはじめとする文化行政にも尽力している。このような業績、努力が認められ、スロカルトの王より、宮廷舞踊の保存と発展に関する総括責任者にも任命されている。

自らも優れた舞踊家であり、後継者の育成を通じてジャワ古来の文化の保存と発展にも尽力するクス・ムルティア・パク・ブウォノ氏の功績は、まさに「福岡アジア文化賞－芸術・文化賞」にふさわしい。

第23回 福岡アジア文化賞 授賞式

■日時：9月13日（木）
■会場：福岡国際会議場
■司会：ジュディ・オング

第23回福岡アジア文化賞の授賞式は、秋篠宮同妃両殿下の御臨席を賜り、市民をはじめ各国の来賓、各界関係者など約1,000人の皆様が参集して開催され、受賞者の栄誉を讃えました。

福岡アジア文化賞が創設された1990年からの受賞者88名の紹介映像が投影された後、第1部の開会。栄えある4人の受賞者が、和服姿の筑紫女学園大学アジア文化学科の学生に導かれて登場。髙島宗一郎福岡市長が「この賞が国境を越えた友情と信頼を育むことに貢献している」とあいさつした後、秋篠宮殿下より祝福のお言葉を賜りました。続いて、福岡アジア文化賞審査委員長の有川節夫九州大学総長が選考経過を報告。

そして、髙島市長と鎌田迪貞よかトピア記念国際財団理事長が、受賞者それぞれに華麗な博多織で装幀された賞状と、福岡市の花フヨウがデザインされたメダルを贈呈。引き続き、受賞者による感謝と喜びのスピーチが述べられ、市民代表の針塚瑞樹さんからお祝いの言葉が贈られました。最後に、民族衣装を着た福岡インターナショナルスクールのかわいい子どもたちが登場。受賞者とそれぞれの同伴者の皆様に花束を手渡すと、会場は盛大な拍手に包まれました。

第2部では、ジュディ・オングさんの司会により4人の受賞者が、市民から寄せられた質問に答えていく対談を展開。福岡の印象については「福岡に来て、連日おいしさを満喫しています」「ハッピーな岡（丘）で、幸せを感じています」「福岡は純粋で魅力的な街」「ニシンそばが好きだったけど、博多ラーメンのファンになりました」など、愉快な感想が聞かれました。

そして、最後はインドネシアの古都ソロから来福したクラトン・スロカルト王家舞踊家の女性4人による特別公演。今回の受賞の喜びを、ムルティア氏が特別に振り付けた舞踊であり、エキゾチックなガムラン音楽が流れる中、金の冠、緑の帯を着け、後ろ足で衣装の裾を跳ね上げる優雅なしぐさの踊りが人々を魅了しました。

式次第

【第1部】

受賞者紹介	
主催者代表あいさつ	福岡市長　髙島　宗一郎
お言葉	秋篠宮殿下
選考経過報告	福岡アジア文化賞審査委員会委員長　有川　節夫
贈賞	福岡市長　髙島　宗一郎 (公財)よかトピア記念国際財団理事長　鎌田　迪貞
受賞者あいさつ	
市民代表お祝いの言葉	

【第2部】

受賞者とジュディ・オングさんとの対談
特別公演　インドネシア宮廷舞踊
閉式

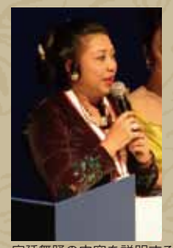
髙島福岡市長による主催者代表あいさつ

有川九州大学総長による選考経過の報告

ジュディ・オングさんによる司会

受賞者とジュディ・オングさんの対談

賞状を贈る鎌田よかトピア記念国際財団理事長（左）


宮廷舞踊の内容を説明する

ムルティアさん（左写真）とその舞踊（右写真）

第23回 福岡アジア文化賞授賞式
秋篠宮殿下お言葉

本日、福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、受賞される4名の方々に心からお祝いを申し上げます。

国際社会におけるグローバル化が進展する今日、それに伴って画一化した思考方法や生活様式が広まりつつあります。そのような中、多くの国や地域では固有の文化や伝統などの保存と継承に力をつくしつつ、新しい文化の創造にも多くの努力を重ねてきております。

アジアは、多様な自然環境や風土に恵まれ、長い歴史の中で、はぐくまれてきた各地域固有の言語や歴史、民俗など文化に豊かさや深さがあります。私自身、アジアの諸地域を訪れるおりに、その豊かさや深さに感銘を受けるとともに、それらを保存し継承していくことの大切さを強く感じます。

福岡アジア文化賞は、アジアの固有で多様な文化の保存と継承、そして創造に寄与することを目的とするものであり、大変意義深いものと考えます。本日受賞される方々の優れた業績は、アジアの文化に対する貢献だけでなく、世界に対してその意義を広く示すとともに、社会全体で共有し、次の世代へと引き継がれる人類の貴重な財産になるものと思います。

終わりに、受賞される皆様に改めて敬意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好がより一層促進されることを願い、私のあいさつといたします。

祝賀会

授賞式後、各界の関係者の参加を得て、華やかに祝賀会が開催されました。各受賞者も、リラックスした表情を見せ、和やかな雰囲気に包まれました。

また、福岡アジアマンスの主要事業アジアフォーカス・福岡国際映画祭から、台湾映画『天龍一座がゆく』のワン・ユィリン監督や出演者がゲストとして参加。会場を盛り上げてくれました。

会場のあちらこちらには、各受賞者を囲んでいくつもの談笑の輪が広がり、受賞者を祝福する光景が見られました。

アジアフォーカスより参加

Grand Prize

大賞
ヴァンダナ・シヴァ

世界の平和と正義のために、多様性を守り、広げていく

今回、栄えある福岡アジア文化賞の大賞を受賞することができたことを、大変、光栄に思います。この受賞は、私が30年以上続けてきた多種多様な種子の育成や、種子の自由な利用などの、多様性を守り、深めていく活動に対して大きな助力となることでしょう。

多様性というのは、様々なもの、あるいは様々な可能性を生み出すものです。自然は多様なものであり、文化もまた多様であるべきです。すべての人々は、皆それぞれが違うのです。たとえば、ここにいる皆さんが、全員黒のスーツを着ていたら、つまらないでしょ？　また、食べ物を作るということは、様々な多様性を作るということであり、そのために私たちは様々なことに取り組んでいるわけです。私がずっと行っているナヴダニヤでの農業活動も、その1つにすぎません。

これから世界はどんどん狭く、窮屈になるかもしれませんが、私たちは平和と正義のために、もっと多様性を世界に広げていかなければなりません。いかなる文化、いかなる種も協力していかなければならないのです。多様性はすべての人類、すべての種に対する自由を生み出します。種子の多様性は、すべての種が地球上でお互いに自由を持ち、協力し合い、平和に生きていく術を教えてくれるでしょう。

この大賞をいただきましたことを、私は本当にうれしく思っています。なぜなら、世界のための新しい可能性を、アジアを通じて、さらに広げることができると考えているからです。

Academic Prize

学術研究賞
チャーンウィット・カセートシリ

アジア各国の海域交流を教え、私自身も学び続けている

タイや東南アジア、そして、日本の古代史の研究者として、私はこれまでに何度も日本を訪れていますが、福岡に来たのは今回が初めてです。初めての訪問が、この素晴らしい賞の受賞のためというのは、大変に光栄であり、名誉なことだと思っています。

私は、古代のタイ王国であるシャム国と、日本や中国、韓国やインド、インドネシアやフィリピンなど、アジア各国との海域交流について教え、私自身も学んできました。シャム国の首都アユタヤにかつてあった日本人町や、日本人傭兵隊長の山田長政についても研究したことがあります。また、日本人とポルトガル人とのハーフで、マリー・ド・ギマールという女性についても研究しました。彼女は宮廷の料理長となり、タイ料理に初めてスイーツやクッキーを取り入れた人として知られています。

福岡アジア文化賞委員会に認められたのは、自分の教育分野における役割のためだと信じています。そのお陰で私は今、弟とともにこの場所にいるわけです。この栄誉と、福岡という素晴らしい街を訪れる機会を与えていただいたすべての人々に感謝いたします。

そして、お二人の偉大な先達である京都大学の故石井米雄先生と、大阪外国語大学の故吉川利治先生に感謝の意を表したいと思います。お二人のおかげで、私は日本についてより多くを知り、多くを学び、そして日本を愛することができました。最後に、素晴らしい福岡市民の皆様に、心から感謝を申し上げます。

Arts and Culture Prize

芸術・文化賞
キドラット・タヒミック

宇宙の窓に通じた回り道で、地域と地球のバランス回復を

1976年、私は処女作である『悪魔の香り』の編集作業にもがいていました。映画製作の経験のない私は脚本なしで、その映画を撮りました。それだけで私がどんな監督か、分かるでしょう？ドイツの一流映画監督ヴェルナー・ヘルツォーク氏に、その編集中の作品を見せたとき、「キドラット、君は回り道の天才だ。君の宇宙は映画をクレイジーに面白くしているよ」と言われました。

また、1987年、作家の大江健三郎氏に私の作品を見せた時、こう言われました。「タヒミックさんはフィリピンの黒澤だ」と。私は「黒澤先生は完璧主義者ですよ！私なんかとは全然違います」と反論しましたが、大江氏は「黒澤とあなたの作品は、両方とも窓を開ける力を持っている。黒澤映画は日本人の魂の窓を開け、あなたの作品は宇宙への窓を開ける」と言いました。その時は正直、その意味が分かりませんでした。

そのまた12年後、今度はインドのジャイプールで開かれた映画会議で、ある評論家に連れられて彼の師匠に会いました。会うやいなや、その師匠は突然こう言いました。「君は正しい目的地に行くために、正しいスピードで正しい車両に乗っている。先頭の車両に移る必要はない」と。

その時、ヘルツォーク監督に“宇宙的な回り道”と言われ、大江氏に“宇宙への窓”と言われたことが、初めて自分の中で“宇宙”に繋がったのです。この3人の言葉が、タペストリーのように編み込まれ、1つになったのです。計画もなく、まるで漂っているかのように生きることは、宇宙に身を委ねるということなのだ、と気が付いたのです。

親友であるイフガオ族の長老は、“土着の”という意味を持つ“indigenous”(インディジェナス)という単語を“indi-genius”(インディジーニアス＝土着の賢い知恵)と、いつも間違って発音します。ああ！なんと宇宙的な偶然の発音の間違いでしょうか！そして、こう言います。「フィリピンの主流派は、いつも私たちのインディジーニアスな文化を見下している。我々はもっとインディジーニアスな知恵を見直さなければならない」と。先月、国際的な部族会議をフィリピンのバギオで開催しました。25のフィリピン部族と世界中の部族が集まる会議です。その時、妻がこう言ったのです。「こういう人たちの考え方を取り入れれば、アジア人としてのあなたの強味も、もう一度、生きてくる」と。

この5つの話は、おそらく私と宇宙との関わりを言っているものです。私は2つの世界、脚本に満ちた世界と、脚本のない部族の人々の世界を行き来しています。そして、これはある意味、宇宙の窓を出入りするための回り道とも言えます。こうした回り道をすることで、宇宙的アジア人の長所を再発見することができたのです。現代的な知識人が、土地固有の人々の常識をもっと尊重することによって、バランスを失ってしまった私たちの地域のバランスと、地球のバランスを取り戻すことができる、と信じています。

Arts and Culture Prize

芸術・文化賞
クス・ムルティア・パク・ブウォノ

ジャワ文化を後世に引き継ぎ、さらに世界に広めていきたい

本日はお招きいただきまして、誠にありがとうございます。私たちが心穏やかに、また、体健やかに会うことができたことを祝福し、神に感謝いたします。また、同時にスロカルト王宮と家族、そして、福岡アジア文化賞委員会および福岡市に、心より感謝いたします。スロカルト王宮は、私が生まれ育ったところです。インドネシアではジャワ文化はジャワ民族の誇りであり、民族が1つになるために、その文化を長年に渡って受け継いできました。私の祖父であるパク・ブウォノ王11世以来、日本とスロカルト王家との友好関係は、長い間ずっと維持されてきました。この受賞は、友好関係のさらなる発展を願う父パク・ブウォノ王12世の尽力によるもの、と言っても過言ではありません。この受賞の喜びを祖父、そして、父に捧げたいと思います。この受賞が、日本および福岡市とスロカルトとの間の文化交流を見直し、促進する契機になればうれしく思います。この受賞を糧に、芸能にさらに磨きをかけ、ジャワ文化を後世に引き継ぎ、世界に広めていきたいと思います。(日本語で)ミナサマ、ドウモ、アリガトウゴザイマシタ。

Grand Prize

第23回 大賞 受賞者

ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA

インド ／ 環境哲学

市民フォーラム

大地の民主主義（アース・デモクラシー）
～未来へと続く正義と平和の文化を育む～

■開催日／9月11日（火） 18:30～20:30　■会場／アクロス福岡 地下2階イベントホール　■参加者／322人

第一部　基調講演

種子と生態系と持続可能性、それを大切にする社会へ

今日は、この時代にとって本当の自由とは何か、について話します。今、私たちは危機に直面しています。気候変動、種の減少、水質の汚染、水の枯渇などの危機です。2008年のリーマンショックでは、これまでの繁栄が一夜にして崩壊する経済危機を目にしました。いままでの成長、繁栄のアイデアが上手くいかなくなったのです。この地球では、成長に限界がある、というのは科学的な事実です。成長のためには資源を消費し、ゴミが生み出されるからです。さらに、政治危機によって市民の自由が狭まり、文化に対する恐怖や憎しみが広がっています。

20年前、グローバリゼーションという新しい動きが始まりました。私が参加した国際会議で、元は軍事企業であった農薬製造企業が、生きものや生命に対する所有権を求め、農民が種子を保有するのは公正ではないと主張しました。知識も命も生物も、本来すべて共有財であり、地球からの贈り物です。しかし、企業は民主的なプロセスを通さず、自分たちだけで交渉し、知的所有権に関する貿易協定を作りました。私はインドに帰り、すぐに種子を保存する活動を立ち上げました。これがナヴダニヤの運動です。

しかし、企業は種子を知的所有権で囲い込み、一方で農民が種子を保存するのは犯罪だと主張し始めました。その結果、世界の種子は5つの企業に支配されています。ある企業は世界で売られる種子の80%を管理し、遺伝子組み換え種子の98%を所有しています。しかし、食料供給の80%を担っているのは小規模農業であり、巨大な農業企業ではないのです。

この15年間、食料と農業が不安定化し、食品の摂取量は減少し、飢餓も飢饉もひどくなっています。企業という仮想の存在が、水も川も空もCO2も含め、地球のすべてのものを資源として保有しようとし、世界中で資源をめぐる争いが広がっています。企業は人々や地球から際限なく搾取を続けますが、人々や地球に対して何の責任も負いません。こうして地球は生態学的な危機を迎えているのです。

しかし、一方で新しい動きも世界中で起こっています。昨年、アメリカで若者たちが「ウォール街を占拠せよ」という運動を立ち上げました。3兆ドルもの資金が毎日、世界を駆け巡り、貪欲な資金が土地とモノと食料を収奪し、1%の人が99%の資源を支配しています。これに対して雇用の機会を閉ざすことなく、経済をより良い方向に進めていこうという、若者によるムーブメントが始まっています。これまでと違った、既存のものに取って代わる、新しいオルタナティブを作る動きです。

すべてがお金に換算され、それが際限なく増幅する現在の経済から脱却し、種子や生態系、地球全体を考えていく経済にシフトしなければなりません。それには私たちの自由を奪っている企業の支配から脱却するべきです。お金は単なる手段であり、目的ではありません。市民としての役割を考え直し、消費者から脱却して地球市民となること、欲と収奪の文化から、分かち合いの優しい文化へシフトすることが求められているのです。

今回、この福岡アジア文化賞の大賞を、私に与えてくださった意味は大きいと思います。数世紀に渡って繁栄してきたアジアの経験を通じて、「アース・デモクラシー」をグローバルなレベルで展開することによって、多様性を持つアジア、より良いアジアを取り戻すことができると私は信じています。

第二部　パネルディスカッション

●コーディネーター
竹中 千春
（立教大学法学部教授）

●パネリスト
中村 尚司
（龍谷大学研究フェロー）

利子を考えない、イスラムの金融原理

竹中氏　シヴァ先生の基調講演に感銘を受けました。正義と平和、地球と社会を長く持続していく持続可能性を提言されましたが、人間として生きていくこと、多くの人々と生きていくとはどういうことなのか、と考えさせられました。

中村氏　これからは一緒に分かち合うこと、互いにケアすることの大切さを、シヴァ氏は強調されました。私たちが「大地の民主主義」を捉え直さないまま、大企業が利益のために活動することを許していけば、いつか破滅に至ることでしょう。

日本ではアメリカより数10年も前に、企業の政治的権利と政治献金を認めました。以来、企業の政治的意図が実現され、地震がこんなにも多い日本に、数多くの原発が作られた結果、現在の困難な状態を引き受けざるをえなくなったのです。

お金を銀行に預けると価値が増えることについて、キリスト教では長い間、禁止していましたが、イングランド銀行の創設時に初めて利子が導入されました。ところが、イスラムの金融機関では、お金を預けると保管料を取られ、お金を借りても利子を取りません。もしも事業が成功したら、その成果を返してくれればいい、失敗したらともに失敗を引き受ける、という考え方です。この金融原理は評価できるのではないでしょうか。

社会、関係、種子、これこそが本当の富

シヴァ氏　私たちは仮想の経済の中で生きています。人々が懸命に働いて貯めたお金が、少数の資本家の投機的なギャンブルに使われています。経済と社会をきちんと作り直すためには、この見えない仮想のお金を分離して規制し、本当の富を管理することです。本当の富とは、私たちの社会であり、関係であり、種子と作物であり、お互いにケアし合うところにあるのです。

ところが、グローバリゼーションの中で企業がすべてを決定し、無制限な欲望が世界規模で拡大しています。本来、ビジネスとは社会的に認められた活動であり、一定の規制の中で適切な利益を上げるものです。だからこそ、企業はビジネスに帰り、デモクラシーの中で社会のルールに従う必要があるのです。

VOICE

▼5年前から自然農に取り組んでいますが、シヴァ先生の本を読んで尊敬していました。今日の講演では、自分たち自身の手で社会システムを創ることの大切さを、改めて痛感しました。村上研二さん（左：福岡県糸島市）▼原発事故を経験した私たちは、企業優先の社会から脱却し、市民としての自由を取り戻さなければならない、と強く感じました。前田亜礼さん（右：福岡市中央区桜坂）

アジア文化サロン

■実施日／9月10日（水） 16:00～18:00
■会　場／九州大学箱崎キャンパス

あらゆる人間と生き物は、同じ地球に生きる家族であるという「大地の民主主義＝アース・デモクラシー」を提唱するシヴァ氏を、インドの教育人類学や教育史、インド哲学やアジア女性交流研究者など約15名が囲み、熱気あふれる交流が行われました。

シヴァ氏は、インドでの原発やダムの建設に対する平和的反対運動の現状、インドの社会と農業の変動などを背景に、自らの活動に影響を与えた出来事などを報告。今後の取り組みとして、「人々と資源を使い捨てにする社会から、地球を中心とした女性や子どもなど、弱者のための社会へのシフトすることが重要」と指摘し、大きな思想(Big concept)と小さな実践(Very Small Step)を実行することの意義を訴えました。さらに、インドの教育方法や女性の考え方、個人のアイデンティティなどについて、活発な質疑応答と議論が繰り広げられました。

学校訪問

■実施日／9月11日（火）
13:25～15:00
■会　場／福岡県立城南高等学校

量子論の研究者であったシヴァ氏は、科学的な視点から地球環境を見つめ、森を守る「チプコ運動」と、生物多様性と種子を守る「ナヴダニヤ運動」に取り組んできた経緯を語りました。そして、種子・水・窒素のサイクルが、地球の持続可能な生態系を支えていることを理解し、社会のあり方を考えてほしいと、生徒に訴えました。

さらに、「利益のみを追求する貪欲な大企業は、遺伝子組み換え技術と知的財産権の特許によって種子の保有を独占。高価な種子の購入を農民に強制し、多くの農家を貧困に追い込んでいます」と指摘した後、「自分たちが作りたい未来を目指す時、何か障害が起こったとしても、決してあきらめないでほしい」と強調しました。

その後、生徒からの質問を受け、遺伝子組み換え食品について複数の実験結果を示し、その弊害を説明するなど、活発な質疑応答が行われました。

Academic Prize

第23回 学術研究賞受賞者

チャーンウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI

タイ ／ 歴史学・政治学

市民フォーラム

国際都市アユタヤをめぐる海域交流
～日本からアラビアまで～

■開催日／9月14日（金） 18:30～20:30　■会場／アクロス福岡 地下2階イベントホール　■参加者／152人

第一部　基調講演

洋の東西を結んだ王都 日本船も交易に訪れていた

アユタヤは古代のタイ王国シャムの都であり、14世紀から18世紀の417年間、5つの王朝によって統治されました。主な宗教は仏教ですが、庶民には精霊崇拝、いわゆるアニミズムもありました。この封建国家の人々の身分は王、貴族、僧、平民という4つの階層に区分され、平民には無給の強制労働が課せられ、税は現金または物納でした。この都はチャオプラヤー川など、3つの川の合流地点の島であるため、外敵から守られ、周囲の平野は洪水で運ばれてきた肥沃な土のデルタ地帯で、稲作の適地でした。上流の高地から様々な森林の産物が集まる重要拠点であり、これらがアユタヤ繁栄の要因となりました。

東の南シナ海、西のインド洋の中間に位置するアユタヤでは、早くから海上交通が発達。海上ルートは日本からアラビアまで、遥かに伸びていたと考えられます。14世紀のアユタヤ王国の設立後、海外交易はさらに盛んになり、18世紀まで続きました。海外交易を独占していた王室は、17世紀、年間40万バーツの利益を上げていました。これは当時の国家予算150万バーツのうち、約25%を占める金額でした。港には中国のジャンク船やポルトガル船、オランダ船、日本の朱印船などが来航。日本への輸出品は、染料に使われた蘇芳や、甲冑用の鹿皮、象牙など。輸入品は銅、鉄、漆器、和紙など。ヨーロッパからは銃砲類が輸入され、タイとアジアの戦争技術に変化をもたらしました。

現在、アユタヤはユネスコの世界遺産に登録され、旅行者に人気があります。昨年、タイは洪水に見舞われましたが、観光局の資料では、アユタヤへの観光客数は計570万人。このうち外国人が120万人ですが、日本人は40万人、約30%を占めています。今年6月までの集計では日本人は73万人であり、そのうち29万人がアユタヤを訪れているのです。

第二部　パネルディスカッション

アユタヤを拠点に、琉球はアジアへ雄飛

●コーディネーター
新田 栄治
（鹿児島大学法文学部教授）

新田氏　今日は、琉球を中心としたアジアの海上貿易を研究する岡本先生と、オランダを中心とするヨーロッパの貿易関係を研究する藤田先生という、気鋭の研究者をお招きしています。

岡本氏　琉球とアユタヤの交流を、東の日本の視点から見てみます。琉球王国は中国の明、日本、朝鮮などに外交使節としての交易船を自ら派遣するなど、東南アジアで常に広範囲な海域交流を展開。琉球王府の外交文書を記録した漢文史料「歴代宝案」によれば、派遣先で最も多いのは、やはりアユタヤです。

琉球はアユタヤを機軸として、明、朝鮮、日本などに交易船を派遣し、各地の産物を運ぶ中継貿易を幅広く展開していました。中でも明へは14世紀末から15世紀前半のピーク時には毎年2～3回、16世紀以降も年に1～1.5回、交易船を派遣しています。一方、アユタヤは14世紀、成立直後の明へ度々、交易船を派遣しましたが、琉球の明への派遣が増えると次第に減少。これは琉球が明の産物を仲介したため、明との朝貢貿易を続ける意味合いが薄れたことによるもの、と考えられます。

藤田氏　14～15世紀、海域アジアの港市では、アユタヤを典型例とする空間的特徴が見られます。外来の海洋商業民が民族・国籍ごとに港市の外縁部に居留地を形成し、国際的混住が実現されていました。ところが、17世紀の長崎では海上に出島を築き、厳しい貿易管理と異民族管理が行われていたのです。

王との謁見儀礼を絵画資料から見てみると、体を伸ばして使者から親書を受け取るアユタヤ王の姿から、謁見儀礼の柔軟さや海外交流への積極姿勢がうかがわれます。一方、徳川時代のオランダ商館長の江戸参府では、200年間に数100回も行われた拝謁シーンは、一度も絵画に描かれていません。謁見儀礼が定型化され、外国人が恭順の意を表わす場と考えられたため、と思われますが、その背景に政治哲学の違いが見えてきます。

●パネリスト
岡本 弘道
（県立広島大学
人間文化学部准教授）

●パネリスト
藤田 加代子
（立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋学部准教授）

タイ人にとって、スコータイは桃源郷

チャーンウィット氏　岡本先生のお話に関連して言えば、東アジアでは海上ルートの各部分を、沿岸各国が役割分担して管理していたと思われます。これに対して、イギリス人やオランダ人は全ルートを独占し、全体を統括していたと考えられます。藤田先生のお話では、謁見儀礼ではアユタヤの王権は柔軟で、徳川将軍は大変に厳しいとのことでしたが、京都大学の故石井米雄先生が言われた「シャムの王は素晴らしい商人であり、貿易に対してより積極的だった」という言葉を思い出しました。

新田氏　会場からの質問ですが、タイではスコータイとアユタヤは、どのように捉えられていますか。それから、タイでは山田長政はどのように思われていますか、ということですが…。

チャーンウィット氏　先にスコータイが起こり、後にアユタヤが起こりましたが、タイ人にとってスコータイは黄金の時代であり、桃源郷です。欧米の民主主義を真似しなくても、我々にはスコータイの素晴らしい歴史がある、と思われています。山田長政については、タイの教科書には多くは書かれていません。人格は素晴らしいが、偉大な人物とは思われていないようです。

VOICE

▼タイから留学して1年ですが、タイ人でも知らない話を聞くことができました。アユタヤはアジアだけではなく、ヨーロッパとも交易していたことに驚きました。プラパソン・シリヴィ・チャイさん（左：福岡市東区香椎）▼タイ人と日本人の常識に、大きな違いがあることを改めて知りました。スコータイの時代を大切に思うタイ人の気持ちが、とても新鮮でした。城戸文子さん（右：福岡市博多区麦野）

アジア文化サロン

■実施日／9月15日（土） 16:00～18:00
■会　場／福岡市博物館　2階講座室

福岡市博物館で開かれた文化サロンは、東南アジア研究者など約15人が参加し、宗教と国家建設、都市の破壊、シャム美術などの研究発表が行われました。

続いて、チャーンウィット氏によるアユタヤ研究に関する講演の後、全体での意見交換に移りました。国王を神と見なしていたかどうかについて、近年のカンボジア史研究の成果と、旧来の研究に基づくタイの通説との食い違いが指摘されたほか、アユタヤの海域交易での役割と、現代バンコクの国際流通ハブ都市としての役割の比較など、興味深い内容について様々な議論が繰り広げられました。また、近年の日本史研究の成果として、日本の鎖国を物流や情報の流入が続いていたことを重視する観点から、“鎖国”ではなく“海禁”と捉えるべきだ、という新しい見解が提出されるなど、会場は研究者の熱気に包まれていました。

学校訪問

■実施日／9月14日（金）
13:30～16:45
■会　場／福岡県立福岡中央高等学校

吹奏楽部によるタイ国歌の演奏、アニメーションを交えたチャーンウィット氏自己紹介ビデオの投影の後、約750名の生徒を前に「アユタヤから福岡へ、愛を込めて」というタイトルで、チャーンウィット氏による講演がスタート。「私は教師であり、いつまでも学生です」という印象的な言葉から始まり、「今回の受賞の縁で、福岡が第二の故郷になるかもしれない」と、受賞の喜びを語られました。

講演は、17世紀のアユタヤの絵図、港に来航した様々な外国船、タイ観光局の統計データ、歴史上のアユタヤと日本人町の概要など、多彩な画像・資料を交えて分かりやすく展開されました。さらに、「勉強することと教えることは、決して終わりのない物語です。皆さん、学校を卒業してからも、ずっと学生であり続けてください」という熱いメッセージで生徒を大いに刺激しました。講演終了後、茶室「香蘭亭」で箏曲部による琴の演奏、茶道部による抹茶のもてなしを受け、とても喜ばれていました。

Arts and Culture Prize

第23回 芸術・文化賞 受賞者

キドラット・タヒミック
Kidlat Tahimik

フィリピン ／ 映画作家・インスタレーション、パフォーマンスアーティスト・文化観察者

市民フォーラム

キドラット・タヒミックの映画＝宇宙
～アジア・インディペンデント映画のパイオニア～

■開催日／9月16日（日） 13:30～18:30　■会場／エルガーラ 大ホール　■参加者／363人

◆会場ロビーにタヒミック氏のインスタレーションの展示。竹製ムービーカメラを持つ男や等身大の竹人形、風の女神と向かい合うマリリンモンロー像…。様々なモチーフが対峙しながら、土着的な雰囲気に満ちた不思議な時空が創出されていました。

◆この市民フォーラムでは、「悪夢の香り」（1977年製作／95分）の上映後、タヒミック氏と石坂健治氏による対談。続いて、「虹のアルバム　僕は怒れる黄色 '94」（1994年製作／60分バージョン）と、「マゼラン」（製作進行中の最新作）が上映され、タヒミック・ファミリーによるパフォーマンスが行われました。

対談

どのような物語を語るのか まさに、それが重要な時代

●対談者
石坂 健治
（日本映画大学教授、東京国際映画祭アジア部門ディレクター）

石坂氏　ベトナム戦争の狂気を表現したフランシス・F・コッポラ監督の「地獄の黙示録」は、フィリピンの森林で撮影されたもので、実は「悪夢の香り」の製作と同じ時期、地域ですが…。

タヒミック氏　20kmと離れていない場所でしたが、当時は何も知りませんでした。製作費2400万ドルを投入した超大作でしたが、私の方はわずか1万ドル。後にコッポラ監督の作品を見て、素晴らしいと思いました。私は同胞の強さ、村の長老、昔ながらの伝統や知恵の大切さを、どう表現するのか考えていました。私たちはマクドナルドやケンタッキーなどを通して、胃袋の中からグローバリゼーションに染まり、外国文化に支配されてきました。しかし、フィリピン人もどの国の人も、世界で尊敬されるべき存在でなければならない、と考えていたのです。

石坂氏　アジアフォーカス・福岡国際映画祭のディレクターを務めた佐藤忠雄先生の名言に「アジア映画のいいところは、物を壊さないところだ」というのがあります。「地獄の黙示録」でも森を燃やすシーンがあって、後にコッポラ監督の会社は倒産したのですが、森の神様の怒りに触れたのではないでしょうか。

タヒミック氏　彼もお金がなくなったと聞きましたが、私は最初から一文なし。多くの場所で上映しましたが、大きな収益を上げられていません。しかし、彼にはとても感謝しています。

石坂氏　コッポラ監督は「悪夢の香り」のアメリカでの配給元でしたね。この「悪夢の香り」には、グローバリゼーションという言葉もない時代なのに、いろんな要素が入っていますね。

タヒミック氏　アメリカを崇拝する文化や映画がどんどん入ってきます。そこでは、例えフィリピン人が撮った映画だとしても、アメリカの影響を受けたメッセージや価値観を、観客に与えてしまうことが問題です。元々、フィリピンにあったものではない精神構造や価値観に接していると、私たちは私たちでなくなるのではないか、と心配になるのです。

ロビーの作品、見てもらえましたか。フィリピン北部、棚田が広がる山里に暮らすイフガオ族は、イナビアンという風の女神、台風の女神を信じています。それに対するもう1つのシンボルは、誰だか分かりますね。（突然、竹製のカメラを構えて）みなさん、カメラに向かって笑ってください。このバンブーカメラだと、自分自身の目と魂で見た映像や、風の女神の姿が撮れるのです。ハリウッドで大量生産される映画の対極のものとして、私たちの伝統的な女神はあります。物語を語る時、何を語るのか、何を示していくのかが重要な時代です。他国の文化をコピーするだけでは、きちんとした世界市民にはなれません。

石坂氏　「悪夢の香り」が発表された1977年は、「スターウォーズ」の第1作目がスタートした年に当たりますね。

タヒミック氏　「悪夢の香り」のラストに、主人公が風の女神の力を借りて宇宙へ昇って行くシーンを入れています。この宇宙は比喩で、アポロや新幹線はすごいなあ、という先進国への憧れの表現です。でも、宇宙飛行士に憧れる第三世界にはヒーローとして、例えば、風の女神がいるじゃないか、ということです。

石坂氏　この後、上映する作品について一言ずつお願いします。

タヒミック氏　「虹のアルバム…」は3人の息子が育つ姿を撮影しながら、マルコス政権対アキノ候補の政治的な意味を重ねた作品です。「マゼラン」は、マゼランに買われた奴隷が宇宙の力に導かれて、初めて地球一周をしてしまう物語です。

石坂氏　では、毎回、上映時間が変更になる作品と、なかなか完成しない、製作進行中の作品の2本立てです。

パフォーマンス

昔から土地に伝わる物語の映画を作ろう！

◆会場の後方から、タヒミック氏がドラを鳴らしながら登場。

タヒミック氏　すべての学科を修めましたので、大ヒット作の映画製作博士号を授与します（と、修了証書を受け取る仕種）。さあ、イフガオの村に帰って、棚田でのセックスをテーマに映画を作ろう。お母さん、見て。博士号を取ったんだから、もう、働かなくてもいいんだ。セックス・プラス・バイオレンスで大ヒット、間違いなしさ。棚田にランボーが現れて大暴れするんだ。簡単にお金もうけができるんだ。でも、昔の歌を忘れちゃった（ドラを鳴らし、歩き回る）。あ～、やっと思い出した。ご先祖様はどんなふうに僕にお話を語ってくれたのか。高速カメラがなくても、物語を作ろう。そう、バンブーカメラがあるじゃないか！　これで棚田の物語を作ろう（3人の息子さんとタヒミック夫人が楽器を鳴らしながら登場）。風の女神、昔からある多くの物語の映画を作ろう。イフガオ、万歳。インディペンデント、万歳！

VOICE

▼独特のタヒミックワールド、引き込まれました。これまで触れる機会がなかっただけに、素晴らしい体験でした。吉村望さん（左：福岡市早良区南庄）▼すごく面白かった。フィリピンの土着の精神を大事にしていることに共感しました。山木圭さん（中：福岡市中央区六本松）▼仙人のような生タヒミックさんに会えて感激。アメリカナイズへの風刺も愉快です。松本慎太朗さん（右：福岡市博多区吉塚）

アジア文化サロン

■実施日／9月15日（土） 17:00～18:30
■会　場／福岡アジア美術館　7階彫刻ラウンジ

タヒミック氏のインスタレーションが展示された彫刻ロビーには映像・美術・アジア地域研究の方々約30名が集結。福岡ユネスコ協会事務局長の山口吉則氏の司会進行でスタート。市民フォーラムで対談する石坂健治氏から、タヒミック氏の独自のアート活動が紹介されました。また、イフガオと日本の稲作作業を見つめた「サム・モア・ライス」が上映されました。

タヒミック氏はグローバリゼーションの弊害について、土地の固有の文化がグローバル文化の下に置かれる状況を指摘。自分たちの歴史や文化、考え方や行いの基準を若者たちに伝えてきた長老の役割が、TVや映画に取って代わられている現実に「これは文化の第三次世界大戦だ」と警鐘を鳴らし、さらに、「魂の底から伝えたいメッセージがあれば、どこの国の人にも受け入れられ、共感されるはず」という力強いメッセージが発信されました。

学校訪問

■実施日／9月14日（金）
14:00～15:00
■会　場／福岡市立笹丘小学校

タヒミック氏とファミリーの皆さんが、楽器を鳴らしながら登場すると、約400名の児童たちは盛大な拍手で歓迎。マガダン・ハーポン（こんにちは）とあいさつを交わし、タヒミック氏がフィリピンの国を紹介。展示されたインスタレーションから竹製カメラを取り出し、「ゴジラ」のテーマ曲を口ずさみ、子どもたちにカメラを向けると大爆笑の渦。「このタケカメラで、自分たちの土地に昔からあるものを撮っています。東京やニューヨークの話もいいけど、自分たちが住んでいる、小さな村や町の話をしてください」と呼びかけました。

そして、家族とともにフィリピンの楽器を紹介して演奏。続いて、フィリピンの学校の様子などを上映。お返しに児童たちがフィリピンの民謡「レロン・レロン・シンタ」と校歌を演奏。最後は、フィリピンの歌に合わせてみんなでダンス。会場は熱い手拍子に包まれました。

Arts and Culture Prize

第23回 芸術・文化賞 受賞者

クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono

インドネシア ／ 舞踊

市民フォーラム

ジャワ・スロカルト王家のガムランと舞踊
～伝統の源から世界に向けて～

■開催日／9月15日（土） 13:30～15:30　■会場／アクロス福岡 地下2階イベントホール　■参加者／612人

第一部　ガムラン演奏と女性宮廷舞踊スリンピ

領土は武力ではなく、王の霊力が及ぶところ

●司会進行・対談者
田村史子
（筑紫女学園大学准教授）

◆閉会とともにステージは暗転。オレンジ色の照明の中、ゆったりとしたリズムのガムラン演奏（ジャワの古典曲「ウィルジュン」）が、静かに始まりました。

田村氏　私は高校生の時に初めてガムランの音を聞き、この音の中に母の胎内の音と、大宇宙の音を同時に聞いたような気がしました。以来、ずっとガムランの研究を続けています。世界中の音楽を研究するのが私の仕事ですが、民族がそれぞれ違う言葉を話すように、固有の独特な音楽を持っています。今、ガムランの音を聞いて、とても不思議な音と感じられたのではないでしょうか。

人間はなぜ音楽を持つのでしょうか。人間は言葉を持つ以前から歌ったり、踊ったりしてきました。宇宙の始まりや地球46億年の歴史の記憶が、私たちの中にはあるはずです。しかし、それは言葉では表せないものです。それぞれの民族が違う音楽や踊りを持っていますが、その根源は一つだと思います。私たちは宇宙のどこかからやってきて、この地球に生れましたが、その長い長い歴史を音の中に表しているのではないでしょうか。深いところで音楽が共通しているのはそのためです。

インドネシアには固有のアミニズム文化がありますが、ヒンドゥー教の影響もあります。13～14世紀にはイスラム教が入り、その影響を受けたマタラム王家が成立。その末裔がスロカルト王家です。ジャワの王家は武力で領土を広げるのではなく、ガムランと踊りの力によって高められた王様の、霊力の及ぶ範囲が王国となります。従って、王家の中核にある伝統的なガムランと踊りが、聖なる宝物として受け継がれているのです。

1945年にインドネシア共和国が成立し、王制はなくなりましたが、今でも文化的な中核としての役割を果たしています。しかし、政治基盤が失われたため、経済的には非常に苦しい状況に置かれています。伝統的なものと言うと、古いままのものと思われがちですが、ガムランは生きている伝統であり、それに従いながら、常に新しい要素を付け加えて進んでいるのです。

◆次の曲はスリンピと言われる宮廷舞踊「ウルシル・ルクミ＝金の知らせ」。今回の受賞に触発されて演奏団の団長であるサプトディニングラット氏が詩と曲を作りました。

田村氏　この曲の歌詞には、これまでムルティア氏が王家を守ってきたこと、この受賞から未来へ向かう希望などが詩的な言葉でつづられており、これにムルティアさんご自身が踊りを振り付けたものです。

◆4人の若い女性が、ゆるやかに流れるリズムと旋律、伸びやかな歌声に合わせて優雅に、華麗に舞い踊ります。

田村氏　途中で戦いのシーンがありましたが、あれは伝統を壊そうとする様々なものとの戦いを表現しています。実際に王宮にホテルを作ろうという動きに対して、ムルティアさんは伝統を壊すと反対を貫き、闘う王女として連日、報道されたのです。

第二部　対談とムルティア氏による実演

裾から散る花びらが、秘めた思いを暗示

田村氏　先程、踊り手の裾から花びらがこぼれて、驚かれた方もいるかと思います。バリとジャワはどちらもヒンドゥー教の影響を受けていますが、ジャワ文化ではイスラム神秘主義と融合した、内面的な文化が培われてきました。バリでは見えるところに花を飾りますが、ジャワでは裾の中に花びらを隠し、内に秘めた思いがハラリとこぼれる、という情景に繋がるのです。

ムルティア氏　ジャワの宮廷舞踊には9人で踊る基本のブドヨと、4人で踊るスリンピがあります。伝説によると1586年、マタラム王家は初代の王様が海の女神と出会い、結婚して作られた国であり、その物語を踊り、奏でるのがガムランです。ブドヨは娯楽のためではなく、王の精神的な修養のために踊られ、王は欲望を退けて瞑想し、霊力と精神力を高めていくのです。

◆ムルティア氏が女性舞踊の指、脚、腰などの基本的な構えと動きを実演。その優雅なしぐさで、観客を魅了します。

田村氏　スロカルトの王宮では常にガムランが鳴っていますね。

ムルティア氏　ガムランの曲は儀礼ごとに決まっていて、その音を聞けば、何の儀礼がどこまで進んでいるのかが分かります。

◆王宮からの出発、王族の結婚式などの曲のガムラン演奏。兵士の行進曲に合わせ、ムルティア氏が弓矢を持って進む兵士の身振りを真似ながら、ユーモラスな踊りを見せます。

田村氏　王女様が兵士のように歩く姿は、日本でしか見られません。ジャワでは絶対にありえないものです（笑いと拍手）。続いて、ガムランのトップ演奏家5名による演奏です。皆様も瞑想してみてください。日々の暮らしの中で、心の中心が次第に上がっていますから、それを静かに下げていくようなイメージです。私たちはどこから来て、どこへ行くのか…。

◆揺れるようなリズムの演奏と、細く優しく流れる歌声

田村氏　次は、理想の女性を求めてさまよう戦士の踊りです。ダイナミックな太鼓のリズムが、踊りに命を与えます。

◆髭を蓄えた長い黒髪の男性が登場。速いリズムで力強い舞踊を披露

田村氏　今日はジャワの素晴らしい芸術・文化を知っていただき、大変にうれしく思います。経済的基盤の弱い中、伝統を守り続けてきたムルティアさんの功績は、大変に大きいものです（盛大な拍手）。

VOICE

▼ガムランの音色が素敵でした。幻想的で無限の広がりが感じられ、まるで、木漏れ日の落葉松林で柔らかな落ち葉を踏んで歩くような浮遊感がありました。芦田正子さん（左：福岡市東区千早）▼素晴らしかったです。ガムラン音楽と舞踊、どちらも初めて見聞きして、大変に感激しました。できれば、いろいろなジャワの舞踊を、もっと見てみたくなりました。仁田原絹代さん（右：福岡市東区千早）

アジア文化サロン

■実施日／9月16日（日） 10:00～11:30
■会　場／九州国立博物館 1階ミュージアムホール

開会前からガムラン演奏が始まり、踊り手の少女2人がGパン姿で練習する中、温かな雰囲気でスタート。司会は市民フォーラムと同じ田村史子氏。約60名のサロンの参加者にインドネシアのジャワ島、スロカルト王家の歴史、ムルティア氏の生い立ちなどが紹介され、ガムラン演奏団と地元の日本人の演奏グループ「プラティウィ」が、おめでたい「千の鳥」を合奏。そして、ガムラン楽器製造や祝祭などを紹介するビデオが上映されました。

様々な舞踊の実演を見せながら、ムルティア氏が「一連の手足の動きや体の構え方には、外から侵入するものを防ぎ、自分の内から汚れたものを送り出すなど、哲学的な意味が含まれています。舞踊は娯楽ではなく、神と一体となることを目指すものなのです」と解説しました。

その後、ガムラン楽器の体験に参加者を誘うと、いつの間にか、数多くの人々が即興演奏に加わっていました。

学校訪問

■実施日／9月14日（金）
11:00～12:00
■会　場／福岡市立草ヶ江小学校

インドネシアやジャワ島、ガムラン音楽などについて、約700名の児童に田村史子氏が紹介した後、早速、演奏を披露。それぞれの楽器の名前と、その音色を口真似とともに確かめる、愉快な説明が展開されました。その後、児童代表の8名がステージに上がって楽器演奏を体験。途中から手拍子が湧き、会場は次第に盛り上がりました。

そして、ムルティア氏による舞踊の指導。ゆったりとした演奏に合わせ、優雅な女性舞踊の基本のしぐさを児童と一緒に練習しました。「脚を開いて膝を曲げ、両手を広げます。両手の指は影絵のキツネを作るような形にして、手首を回します」と丁寧に説明。その後、髭を蓄えた長い黒髪の男性が登場。速いリズムにピタリと合った、力強い踊りに拍手が高鳴り、通路に進んで児童をにらむと、何度も大歓声が起こります。退場時には出演者を児童が取り巻き、熱い歓声で送り出しました。

国内・海外会見および報道実績

受賞者発表記者会見

6月4日に福岡市で受賞者発表記者会見を開催しました。髙島福岡市長よりあいさつ後、鎌田よかトピア記念国際財団理事長より4名の受賞者が発表されました。続いて有川九州大学総長より、選考経過と贈賞理由の説明があり、稲葉委員長と小西委員長から各受賞者の業績や魅力について、分かりやすいよう映像等を使って解説が行われました。そしてビデオメッセージで、受賞者から生の声をお届けしました。

受賞者からのビデオメッセージ

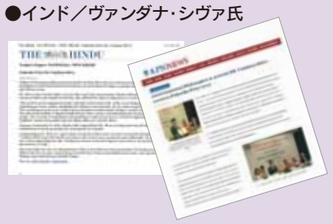
会場（受賞者紹介）

【受賞者発表記者会見】
■日　時：平成24年6月4日（月）
■会　場：ソラリア西鉄ホテル（福岡市）
■出席者：
髙島　宗一郎　福岡市長（文化賞委員会名誉会長）
鎌田　迪貞　（公財）よかトピア記念国際財団理事長（文化賞委員会会長）
有川　節夫　九州大学総長（審査委員長）
稲葉　継雄　九州大学名誉教授（学術研究賞選考委員長）
小西　正捷　立教大学名誉教授（芸術・文化賞選考委員長）

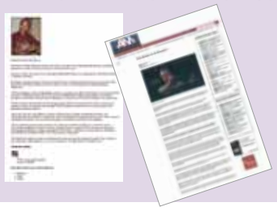
報道実績

【報道件数】　国内：112件　国外：148件　計 260件　（2012年12月12日現在）

●インド／ヴァンダナ・シヴァ氏



●タイ／チャーンウィット・カセートシリ氏



●フィリピン／キドラット・タヒミック氏

●インドネシア／クス・ムルティア氏

第17回大賞
莫言氏がノーベル賞受賞!!

スウェーデン・アカデミーは、2012年のノーベル文学賞を、中国の作家 莫言（モオ・イエン）氏に授与しました。

「幻想的なリアリズムによって、民話、歴史、現代を融合させた」と同アカデミーは評価しました。

福岡アジア文化賞受賞者がノーベル賞を受賞するのは、2001年に第12回福岡アジア文化賞大賞を受賞したムハマド・ユヌス氏に次いで2人目です!!

海外記者会見

それぞれの受賞者が活躍する地元で、受賞決定や受賞報告の記者会見を開催し、現地の政府機関や日本国大使館をはじめ、歴代の受賞者や現地メディアなど多くの参加をいただきました。この海外記者会見では、福岡アジア文化賞の意義や受賞者の功績とともに福岡市を紹介し、その模様が各地で報道されました。

Vandana SHIVA

■受　賞　者／ヴァンダナ・シヴァ氏
■開　催　地／インド（デリー）
■開　催　日／7月23日（月）
■場　　所／ハビタットセンター
■参加者数／130人

［主な来賓・出席者］
•ジャワハル・シルカール氏（インド国営放送局CEO、元文化省次官）
•アシシュ・ナンディ氏（第18回福岡アジア文化賞大賞）
•竹中　千春氏（立教大学教授）
•齋木　昭隆氏（在インド日本国大使）

受賞記念シンポジウムを同日開催。髙島市長より「持続可能な都市を目指す福岡市の環境への取り組み」についてのプレゼンテーション、シヴァ氏により「持続可能な社会への再起～多様性と自然との共生を受け継ぐアジアから～」と題して基調講演。その後竹中氏、シヴァ氏、ナンディ氏、シルカール氏によるパネルディスカッションでは活発な意見が飛び交いました。

Charnvit KASETSIRI

■受　賞　者／チャーンウィット・カセートシリ氏
■開　催　地／タイ（バンコク）
■開　催　日／9月30日（日）
■場　　所／ホテルオークラプレステージバンコク
■参加者数／100人

［主な来賓・出席者］
•パオ・サラシン氏（タイ国トヨタ財団会長）
•青木　伸也氏（在タイ日本国大使館広報文化部長）

受賞の報告とあわせて授賞式をはじめとした公式行事の模様を映像で紹介しました。
会場の飾り付けや受付などタマサート大学の学生さんに手伝っていただき、会場にはたくさんの花束やプレゼントが届くなど温かな会見となりました。

Kidlat Tahimik

■受　賞　者／キドラット・タヒミック氏
■開　催　地／フィリピン（マニラ）
■開　催　日／8月8日（水）
■場　　所／フィリピン文化センター
■参加者数／50人

［主な来賓・出席者］
•マリア・ビクトリア・ヘレラ氏（フィリピンアジア文化センターディレクター）
•ロベス・ナウヤック氏（イフガオ族長老）
•ベン・キャブレラ氏（フィリピン・ナショナルアーティスト）
•ト部　敏直氏（在フィリピン日本国大使）

同会場で、受賞記念としてタヒミック氏の竹カメラや木彫りなどの作品を1ヶ月間展示しました。記者会見では、氏とイフガオ族による歌や踊りのパフォーマンスで、会場を沸かせました。

G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono

■受　賞　者／クス・ムルティア氏
■開　催　地／インドネシア（ジャカルタ）
■開　催　日／11月1日（木）
■場　　所／ジャカルタシアター　XXIクラブ
■参加者数／100人

［主な来賓・出席者］
•スリスティヨ・ティルトクスモ氏（インドネシア教育文化省芸術・映画強化部長）
•鹿取　克章氏（在インドネシア日本国大使）

会見後、ソロ宮廷舞踊が披露され、会場は華やかな雰囲気に包まれました。また、当日は氏の誕生日でもあり、ご家族からのサプライズケーキに、とても嬉しそうなムルティア氏でした。

福岡アジアマンス、広報活動

福岡アジアマンス2012

『福岡アジアマンス』は、福岡の街がアジア一色に染まる季節です。アジアの映画や芸能、食の紹介、各国観光プロモーションなど様々な行事が行われます。その主要事業として、「アジア太平洋フェスティバル福岡」「アジア・フォーカス福岡国際映画祭」、そして「福岡アジア文化賞」があります。福岡アジアマンスを盛り上げるべく、各事業との連携を図っています。受賞者のムルティア氏がアジアマンスオープニングセレモニーに登場。福岡アジア文化賞受賞者としてムルティア氏が紹介され、ソロ王家の宮廷舞踊として4人の踊り手による華麗な舞踊が、約2,000人の観衆の前で披露されました。また、受賞者タヒミック氏の受賞記念として、「アジア・フォーカス福岡国際映画祭」にて映画を2本上映しました。氏の作品の福岡での上映は貴重な機会であると、多くの人が来場しました。

ムルティア氏宮廷舞踊 in 福岡アジアマンス2012 オープニングセレモニー

平成24年9月14日(金)19時
福岡市役所前天神ふれあい広場

タヒミック氏受賞記念 上映会 in アジアフォーカス・福岡国際映画祭

平成24年9月19日(水)
Tジョイ博多

15:45～17:15
『月でヨーヨー』1981年/ 90分

18:45～20:15
『トゥルンバ祭り』1983年/ 90分

福岡アジア美術館におけるインスタレーション

受賞者タヒミック氏の作品を7F彫刻ラウンジにて
約2週間(9/15～27)展示しました。

広報活動

福岡アジア文化賞HPがリニューアルしました!

2012年5月にホームページ(日本語)をリニューアルオープンしました。新しいカテゴリーも増え内容が充実、またfacebookやメールマガジンを使い、随時新しい情報を配信しています。

●福岡アジア文化賞　ホームページ

トップ画面では、カテゴリーが分かりやすいように配置しています。

新着ニュース＆トピックスより
最新の情報を発信しています。

「受賞者特集スペシャル」サイトでは、受賞者のことを、さらに深く楽しく知ることができます。

「資料室」では、過去の報告書、プレスキット、関連動画の掲載。関連書籍・CDなど紹介しています

「facebook」では、受賞者の海外記者会見の様子等、"今"の情報をお届けしています。市民の皆さまと双方向でのやり取りが可能となりました。

様々なツールによる広報活動

受賞者情報を記載した報道用のプレスキット(日本語版・英語版・一部タイ語・インドネシア語版)を作成し、国内外の記者会見などで配布しました。授賞式や市民フォーラムへの参加を呼びかけるチラシを市役所情報プラザや区役所などで配布したほか、文化団体の所属会員に送付、ポスターを各所で配布・掲示するとともに、新聞での告知を行いました。市政だよりでの特集記事や市の広報テレビ番組も活用しています。また、市営地下鉄における中吊り広告、WEB上のYahoo! JAPANバナー広告、市役所1階や西鉄ソラリアにある大型ビジョン広告など、新たな広報ツールを使って広報を行いました。

ホームページリニューアルや様々な広報活動に伴い、ホームページ閲覧数が大きく増加しました。

yahooバナー広告

福岡アジア文化賞チラシ2012

大型ビジョン広告

福岡アジア文化賞委員会委員

2012年8月現在

特別顧問	近藤　誠一	文化庁長官
〃	芝田　政之	外務省国際文化交流審議官
〃	小川　洋	福岡県知事
名誉会長	髙島　宗一郎	福岡市長
会長	鎌田　迪貞	(公財)よかトピア記念国際財団理事長
副会長	有川　節夫	九州大学総長
〃	末吉　紀雄	福岡商工会議所会頭
〃	森　英鷹	福岡市議会議長
〃	山崎　一樹	福岡市副市長
監事	本田　正寛	福岡市社会福祉協議会会長
	石田　佳久	福岡市会計管理者
委員	衛藤　卓也	福岡大学学長
〃	海老井　悦子	福岡県副知事
〃	大石　修二	福岡市議会副議長
〃	小川　弘毅	西部ガス株式会社代表取締役会長
〃	川崎　隆生	西日本新聞社代表取締役社長
〃	喜多　悦子	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	佐藤　尚之	九州運輸局長
〃	佐藤　靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
〃	新藤　恒男	株式会社西日本シティ銀行特別顧問
〃	関口　尚之	日本経済新聞社常務執行役員西部支社代表
〃	田口　五朗	日本放送協会福岡放送局長
〃	多田　昭重	福岡文化連盟理事長
〃	田中　浩二	九州旅客鉄道株式会社相談役
〃	佃　亮二	株式会社福岡銀行前相談役
〃	長尾　亜夫	西日本鉄道株式会社取締役会長
〃	橋田　紘一	株式会社九電工代表取締役社長
〃	原　敏郎	毎日新聞社取締役西部本社代表福岡本部長
〃	広実　郁郎	九州経済産業局長
〃	弘中　喜通	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	三角　公仁隆	福岡市議会第1委員会委員長
〃	宮川　政明	朝日新聞社西部本社代表
〃	八尾坂　修	福岡市教育委員会委員長
〃	山本　盤男	九州産業大学学長
〃	G・W・バークレー	西南学院大学学長

(委員名は50音順、敬称略)

福岡アジア文化賞

歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor

1990（第1回）～2011（第22回）

第1回 1990

創設特別賞

巴　金
BA Jin
（中国／作家）●
『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞

黒澤　明
KUROSAWA Akira
（日本／映画監督）●
「羅生門」はじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
（イギリス／中国科学史研究者）●
中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
（タイ／作家・政治家）●
大河小説「王朝年代記」ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

矢野　暢
YANO Toru
（日本／社会科学者）●
日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991

大　賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
（インド／音楽家・シタール奏者）●
豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
（インドネシア／歴史学者・社会科学者）
東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会科学者。

学術研究賞

中根　千枝
NAKANE Chie
（日本／社会人類学者）
アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE
（アメリカ／日本文学・文化研究者）
大著「日本文学史」はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

●は故人

第3回 1992

大　賞

金　元　龍
KIM Won-yong
（韓国／考古学者）●
東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
（アメリカ／文化人類学者）●
インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

竹内　實
TAKEUCHI Minoru
（日本／中国研究者）
社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
（フィリピン／建築家）●
東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993

大　賞

費　孝　通
FEI Xiaotong
（中国／社会学・人類学者）●
中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞

ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
（マレーシア／経済学者）
マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞

川喜田　二郎
KAWAKITA Jiro
（日本／民族地理学者）●
ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞

ナムジリン・ノロゥバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
（モンゴル／声楽家）●
モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大　賞

スバトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
（タイ／考古学・美術史学者）●
タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞

王　賡　武
WANG Gungwu
（オーストラリア／歴史学者）
華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞

石井　米雄
ISHII Yoneo
（日本／東南アジア研究者）●
タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
（インド／舞踊家）
インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大　賞

クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
（インドネシア／文化人類学者）●
インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞

韓　基　彦
HAHN Ki-un
（韓国／教育学者）●
独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞

辛島　昇
KARASHIMA Noboru
（日本／歴史学者）
刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
（アメリカ／ビデオ・アーティスト）●
テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大賞
王　伸　殊
WANG Zhongshu
（中国／考古学者）
古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞
ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
（ベトナム／歴史学者）
イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞
衞藤　瀋吉
ETO Shinkichi
（日本／国際関係研究者）●
中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞
ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
（パキスタン／カッワーリー歌手）●
イスラーム宗教歌謡カッワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞
チェン・ポン
CHHENG Phon
（カンボジア／劇作家・芸術家）
内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞
ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
（インド／歴史学者）
独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞
樋口　隆康
HIGUCHI Takayasu
（日本／考古学者）
フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞
林　権　澤
IM Kwon-taek
（韓国／映画監督）
韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

大賞
李　基　文
LEE Ki-Moon
（韓国／言語学者）
韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞
スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
（アメリカ／人類学者）
タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞
上田　正昭
UEDA Masaaki
（日本／歴史学者）
日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞
R.M.スダルソノ
R. M. Soedarsono
（インドネシア／舞踊家・舞踊研究者）
芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績をあげたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

大賞
侯　孝　賢
HOU Hsiao Hsien
（台湾／映画監督）
厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞
大林　太良
OBAYASHI Taryo
（日本／民族学者）●
日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞
ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
（タイ／歴史学者）
斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞
タン・ダウ
TANG Da Wu
（シンガポール／ビジュアルアーティスト）
独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

大賞
プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
（インドネシア／作家）●
『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞
タン・トゥン
Than Tun
（ミャンマー／歴史学者）●
厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞
ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
（アイルランド／政治学者）
世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞
ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
（マレーシア／影絵人形遣い）●
マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン（影絵人形遣い）。

第12回 2001

大賞
ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
（バングラデシュ／経済学者）
「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞
速水　佑次郎
HAYAMI Yujiro
（日本／経済学者）
市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞
タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
（タイ／画家）
タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞
マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
（フィリピン／映画監督）●
民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

大賞
張　芸　謀
ZHANG Yimou
（中国／映画監督）
現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞
キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
（スリランカ／歴史学者）
スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞
アンソニー・リード
Anthony REID
（オーストラリア／歴史学者）
『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞
ラット
Lat
（マレーシア／マンガ家）
マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞
外間　守善
HOKAMA Shuzen
（日本／沖縄学者）●
「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
（フィリピン／歴史学者）
東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐　冰
XU Bing
（中国／アーティスト）
独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
Dick LEE
（シンガポール／シンガーソングライター）
シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

大賞

アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
（インド／サロード奏者）

インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞

厲　以　寧
LI Yining
（中国／経済学者）

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞

ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
（ネパール／民俗文化研究者）

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞

ローランド・シルワ
Roland SILVA
（スリランカ／文化遺産保存建築家）

イコモス（国際記念物遺跡会議）委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

大賞

任　東　権
IM Dong-kwon
（韓国／民俗学者）●

韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞

トー・カウン
Thaw Kaung
（ミャンマー／図書館学者）

貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文献保存学の泰斗。

芸術・文化賞

ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
（ラオス／織物研究家）

ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞

タシ・ノルブ
Tashi Norbu
（ブータン／伝統音楽家）

ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

大賞

莫　言
MO Yan
（中国／作家）

現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。
2012年ノーベル文学賞受賞。

学術研究賞

シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
（モンゴル／歴史学者）

世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞

濱下　武志
HAMASHITA Takeshi
（日本／歴史学者）

アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞

アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
（パキスタン／民俗文化保存専門家）

「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

大賞

アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
（インド／社会・文明評論家）

臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞

シーサック・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
（タイ／人類学・考古学者）

関係諸学を総合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞

朱　銘
JU Ming
（台湾／彫刻家）

深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞

金　德　洙
KIM Duk-soo
（韓国／伝統芸能家）

「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

大賞

アン・ホイ
Ann HUI
（香港／映画監督）

幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞

サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
（スリランカ／法学者）

南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績をあげ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞

シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
（マレーシア／社会人類学者）

民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞

フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
（バングラデシュ／音楽家）

バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回 2009

大賞

オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
（フランス／文化地理学者）

欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞

パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
（インド／政治学・歴史学者）

正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきたインドの政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞

三木　稔
MIKI Minoru
（日本／作曲家）●

邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞

蔡　國　強
CAI Guo-Qiang
（中国／現代美術家）

北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第21回 2010

大賞

黄　秉　冀
HWANG Byung-ki
（韓国／音楽家）

韓国の伝統的楽器「伽倻琴（カヤグム）」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞

ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
（米国／政治学者・人類学者）

東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞

毛里　和子
MORI Kazuko
（日本／現代中国研究者）

アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

オン・ケンセン
ONG Keng Sen
（シンガポール／舞台芸術家）

現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第22回 2011

大賞

アン・チュリアン
ANG Choulean
（カンボジア／民族学者・クメール研究者）

「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明し、発表し続け、さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みづくりに尽力した民族学者・クメール研究者。

学術研究賞

趙　東　一
CHO Dong-il
（韓国／文学者）

主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、趙氏の研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及び、韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞

ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW
（ドイツ／建築史家・修復建築家）

南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を建築史学のみならず隣接諸科学を包摂する豊かな学際的研究から高次の哲学的営為として先導してきた建築史家・修復建築家。